

大過去と『場』の共有*

Plus-que-parfait et savoir partagé

岸 彩子

KISHI Ayako

Abstract:

Le plus-que-parfait est considéré comme marquant une action antérieure à une autre action, et qui se passent toutes deux dans le passé. Or, dans un discours, bien qu'il serve à désigner «le passé d'un autre passé», le plus-que-parfait n'est utilisé que très difficilement. Ainsi, l'énoncé «J'ai perdu(t1) la montre que mon père m'AVAIT DONNÉE(t2).» n'est pas naturel. D'où vient cette difficulté ?

En recourant à la notion de «domain of discours»(Recanati 1996), nous avons distingué, dans Kishi(2014, 2015), deux domaines : l'un, limité à une perspective spatio-temporelle, qui conduit à interpréter l'énoncé comme désignant une perception d'événement, l'autre, qui n'est pas limité temporellement, dans lequel s'exprime, non pas une perception, mais un savoir.

Nous formulons l'hypothèse suivante : le plus-que-parfait est toujours interprété dans un deuxième domaine, qui contient le procès au plus-que-parfait(t2) et aussi un autre, t1, préalablement partagé entre les interlocuteurs. Par conséquent, il présente le procès t2 comme un savoir concernant le t1.

keyword:

plus-que-parfait, domain of discours, perception/savoir, savoir partagé

* 本稿は、日本学術振興会科学研究費（基盤研究(B)課題番号18H00677「ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト・モダリティ・エビデンス・エビデンス・エビデンスの対照研究」研究代表者：山村ひろみ）の補助を受けた研究成果の一部である。

1. はじめに

大過去は従来「過去の過去」、「過去時に完了している事態」*un fait accompli qui a eu lieu avant un autre fait passé* (Grevisse Gousse 2011) を表すと説明されてきた。実際に下の例 (1) では大過去に置かれた事態 (t2) [Paul-partir] は [je-arriver] の時点 (t1) より前に完了している。

- 1a) Paul était déjà parti (t2) quand je suis arrivé (t1).
- 1b) Il a tenu (t1) la promesse qu'il m'avait faite (t2).
- 1c) Ça a fini (t1) plus tôt que je te l'avais annoncé (t2).

だが、ある過去時 (t1) より前に完了しているにもかかわらず、大過去が不自然に響く場合がある。下記 (2) の例では「時計を貰った」時点 (t2) は「時計を失くした」時点 (t1) よりも前であることは明らかだが、複合過去が好まれ、大過去を用いると座りが悪い。

「(しょんぼりしているけど) どうしたの?」と聞かれて

-Mais qu'est-ce qu'il y a ?

2a) ? J'ai perdu (t1) la montre que mon père m'avait donnée (t2)

2b) J'ai perdu (t1) la montre que mon père m'a donnée (t2).

また「目が悪くなる」のは「眼科医の忠告を無視」した後なのだが、大過去を用いた (3a) は人工的に響く。

(久しぶりに会った友達に「眼鏡かけるようになったんだ?」と言われて)

- Tiens, tu portes tes lunettes en permanence ?

3a) ? Je n'avais pas suivi (t2) les conseils de mon ophtalmo et ma vue a encore baissé (t1). J'ai été bête.

3b) Je n'ai pas suivi (t2) les conseils de mon ophtalmo et ma vue a encore baissé (t1).

J'ai été bête.

これらの例でなぜ大過去が不自然なのか、大過去を「過去時に完了している事態」を述べるも

のだと考えるだけでは説明できない。大過去使用の可／不可は、単に時間軸上の前後関係を反映しているだけではないように思われる。上記の例で、大過去を不自然／自然にしているものは何なのか。大過去という形態が伝達する「意味」とは何か。

本稿では、Recanati (1996) を基に岸 (2014, 2015) で提案した「領域」の概念を用いて、この問題を考える。領域とは、聞き手が文解釈時に考慮に入れる範囲である。本稿では2種類の領域を想定する。ひとつは、一時空に限定され、出来事文としての解釈を規定するt領域である。もうひとつは、一時空には限定されず、複数の出来事の生起する時空を包括し、その内部では各々の生起時点の差が捨象される非t領域である。この領域では、文は属性を表すものと解釈される。

このような立場から、大過去は一時空に生起する出来事を表すものではないこと、複数の時空を包括する領域（非t領域）で解釈され、その場の背景的な情報、その場に関する知識を表すものであるということを主張する。

大過去は、語り等、大きな文脈を共有した当事者間で使用されることが多い。それまでの物語を知っている読者に向けた場合や、ある事件の経緯を既に知っている人が、新たにアップデートされた新聞記事を読む場合などである。大過去を一文だけ取り出して論じるのは難しいが、それは大過去の使用には、文脈など、すでに話者－受け手が共有している知識が大きく関与するからではないかと考える。

本稿では、会話の冒頭など、文脈が比較的簡単に説明可能な、会話文の中の大過去を取り上げる。(2)は「どうしたの？しょんぼりして」という問いへの「お父さんに貰った時計、失くした…」という答えで、(3)は「あ、眼鏡かけるようになったんだ」への答えである。語りの文脈に現れるものを「語りrécitの大過去」とすると、これは「ディスクールdiscoursの大過去」であると言える。会話の「今」も関わるので、現在にかかわる大過去の一つと言える。

2. 「現在にかかわる大過去」の先行研究

2.1 西村 (1985, 2001)

現在にかかわる大過去の先行研究としては、まず西村 (1985) が挙げられる。西村は「不連続」という概念で現在にかかわる大過去を説明している。「不連続」とは、「中断」、「対立」、「予想の実現」を統括する概念である。

現在にかかわる大過去の例としてまず挙げられるのは下の例4のような「語気緩和の大過去」と呼ばれるものだろう。語彙的意味の部分は「頼みごとがあって来ていた」だが、大過去に置かれたことで「ですが… (やめておきます)」、「ですが… (もう帰ります)」のように語気が緩和されて伝達される。

4) J'étais venu vous demander... 「頼みごとがあって来たのだけれど…」

次の例(5)も現在にかかわる大過去であるが、語気緩和の効果を狙ったものではない。「行為の解消」と呼ばれるこのような例も、西村(1985)では、「不連続」の概念を用いることで語気緩和の例と統一的に説明される。

5) Je n'y avais pas pensé. 「それは考えていなかった」

4の「来る」venir、5の「考えない」ne pas penserのどちらも、大過去に置かれたことで、発話時点において「不連続」なものとして提示されている(「来た<<のだけれど>>(もう帰ります)」)(「考えていなかった<<だが>>(考え出した)」)。

これらの例(4)、(5)は「のに」「が」が間に入れられ、大過去と現在とは逆の方向に話が進んでいる。だが、次の例(6)は、(5)と同じ「行為の解消」とされているが、逆接の接続詞で表されるような方向転換はない。

6a) Je te l'avais bien dit!

「こういうことになると言っていた(その通り→そうになっている)」

6b) Je l'avais bien deviné!

「そういうことだろうと思っていた(その通り→そうになっている)」

2.2 東郷(2011)

現在にかかわる大過去について、東郷(2011)では、「2つのゾーンが発動する」という説明がされている。

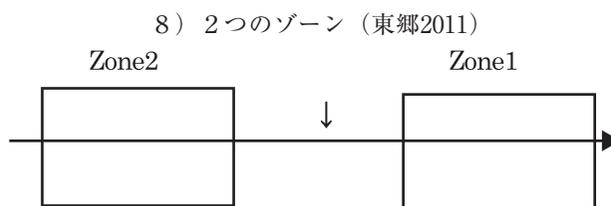
7a) Je t'avais dit de faire attention.

「気を付けなさいと言ったのに」

7b) J'avais vu ce type en ville.

「さっきのあの人、街で見かけたことあったわ」

現在にかかわる大過去のメカニズムは次のようなものであると説明される。時間軸を2つのゾーンに切断する出来事（図8では↓で示される¹⁾）が起き、大過去が表す事態は、現在と切り離されたゾーン2に追いやられる。この結果、「今とは続いていない事態」として提示される。



上記の例(7)では、時間軸が、矢印の事態（ex.皿が割れる）が起きたことで、その前の「割らないように注意すること」が有効なZone2と、最早そのような言いつけが意味をなさないZone1に分断される。大過去に置かれた「注意するように言う」という事態は、今を含むZone1とは相容れない事態なので、Zone2を構成するものとなる。

Zone1とZone2の不連続性が要となっているのは、西村（1985）同様である。この不連続性は、日本語の訳文での逆接の接続詞や「のに」のような表現にも現れている。

2.3 問題点

しかし、これらの説明では、現在にかかわる大過去の一つである(2a)の大過去（J'ai perdu la montre que mon père m'avait donnée）がなぜ奇妙なのか解決しない。

西村（1985）の不連続の概念を用いれば donner ≠ perdre 「貰った（不連続→しかし←）失った（今はない）」となつて的確な大過去になりそうだが、実際はそうではない。また(3a)（Je n'avais pas suivi les conseils de mon ophtalmo et ma vue a encore baissé.）では「眼科医の忠告に従わない（予想の実現）視力が低下」と、上の例（6）の図式は踏襲されているように思えるが、大過去としては不自然になる。

東郷（2011）の「切断する出来事」は、我々のt1の時点に起きる出来事に相当すると思われる

(cf. Tu l'a cassée(t1)! Mais, je t'avais dit(t2) de faire attention!). 上の(7a)においては、言語化されていない「皿が割れた」という出来事が言語外現実にあるために、その前後に分断された2つのゾーンが発動される。では我々の例(2a)のt1の事態 [je-perdre-la montre] は「時計を貰った(持っていた過去)」と「時計がない今」を分断する出来事にはならないのか。

西村(1985)においても、また東郷(2011)においても、現在と組み合わせられた大過去が扱われ、基準点(=本稿のt1)が言語化はされていないものが多い。だが、t1(ex.皿が割れたこと)は、話者-聞き手間で共有され、今現在の両者の関心の中心となっている。同じ時間に現実世界で経験しているので、言語化されるよりむしろ強く共有され、関心を向けられている。大過去の時点t2、転換点t1、そしてディスクールの大過去では「今」が、3点とも等しく注意をひいている、salientになっているというのが、大過去を使う条件になっているのではないだろうか。このことを見るため、「領域」という概念を用いる。

3. 領域と知覚/知識

次のように変えると2aは、自然な発話として容認される。

9) J'ai perdu(t1) la montre que mon père m'AVAIT DONNÉE(t2) il y a deux ans pour mon anniversaire.

2aと変わった点はどこか、大過去を自然にしたのは何かが問題になるのだが、本稿では下線部が加えられることで、領域が変わったのではないかと考える。

3.1 領域 Domain of discourse

文が解釈される時、考慮に入れるべき範囲は限定され、その範囲はあらかじめ話者-聞き手間で共有されている。Recanatiは「量子が関連づけられるのが、ある世界全体とではなく、その一部分だけであるように、文もある『談話の領域』と相対的に解釈されるべきである」としている。

10) Domain of discourse (Recanati1996)

So we see that utterances, like quantifier phrases, are interpreted relative to some partial contextually determined domain of discourse rather than to a fixed, total world. (強調は筆者)

domain of discourse (以下では「領域」と略)とは、解釈時に考慮に入れるべき時間的・空間的範囲である。例(11)のI've had breakfastでは、聞き手は、話者が生まれてから今までのすべての時間の中のどこかで「朝ご飯を食べたことがある」というのではなく、「今日の、朝ご飯をもう食べた」と、正しく解釈する。この時、領域「今日」は話者-聞き手間で了解され共有されている。

11) I've had breakfast (this morning).. (Recanati 2004)

領域：「今日」

3.2 2種類の領域

領域は2種類想定可能である。

Paul fume. という文には2種類の可能な解釈がある。これは2種類の領域が想定されることによる。

12) Paul fume.

ひとつは「今ここ」のような一時空に限定される領域である。これをt領域と呼ぶことにする。この領域で解釈されれば、「今ここで、ポールがタバコを吸っている」という意味になる。

この文にはもうひとつ、「Paulは喫煙者だ」という解釈が成り立つ。こちらは一時空には限定されない。しかし、Recanatiによれば、どんな文も領域が限定されたうえで解釈される。ならば、こちらの解釈も領域が限定されていなければならない。

この場合の領域はPaulが喫煙者である間の時間全体で、Paulの一生の間でもあり得る。この時、実際にPaulが喫煙している、個々の場面が述べられているのではないということに注意したい。それら全体を総括し、なおかつ個々の時点の差を捨象して扱うことで、Paulの属性として「喫煙する」という事態を表すことが可能になる。

13) 2種類の領域

t領域：一時空 (ex. 今ここ) に限定される。

非t領域：一時空には限定されない。複数の時空を、お互いの差を捨象して扱う。

この2種類の領域の対立は「知覚／知識」の対立に重なる。Vogeleer (1994他) では、文が、知覚を表すVOIT (I_{pv}E) と、知識を表すものSAIT (I_{pv}P) に分けられている。

14) 知覚を表す文／知識を表す文 Vogeleer (1994, 1996) Vogeleer & De Mulder (1998)

VOIT (I_{pv} E)

SAIT (I_{pv} P)

I_{pv} : 情報にアクセスする視点の持ち主

E : événement, état

P : «une représentation conceptuelle structurée»

I_{pv}は情報にアクセスする視点の持ち主を表し、Eは出来事événement、または状態étatを指す。Pは構築された概念の表現 «une représentation conceptuelle structurée」、つまり命題propositionである。

E (= 出来事) が知覚Voitの項になっていて、命題pが「知る」の項になっているのは、出来事は見ることができるが、知ることはできない、命題は「知る」ことはできても見ることができない、ということを反映している。知覚は、知覚主体が見える時間的・空間的範囲、つまり一時空に限られるが、知識は、いつでも参照できるので、時間的拘束を受けない。12の例で、Paulがタバコを吸っている「今・ここ」は、今話者が見える範囲である。これに対し、ポールが喫煙者であることを知れば、いつでも「ポールは喫煙者だ」ということができる。

知覚を表す文の領域は一時空に限定される。二時空以上を同時に知覚することは不可能だからである。この種の文は「見たままの出来事」を言述するものである。出来事は一時空に限定された領域 (t領域) で解釈されると言える。これに対し、知識を表す文の領域は非t領域である。知覚の文が、その場で見た出来事を言うのに対し、知識は、知覚の「その場」である一時空から離れて捉えられている。知覚由来であっても、命題であれば知識として表しうる。一度タバコを吸っているPaulを見れば (知覚)、「Paulは喫煙者である」という命題が記憶され、知識として述べることができる。

2つ以上の出来事を関係づけるのも知識の述べ方である。一時空を超えたものは 出来事 (= 誰かが知覚できるもの) ではなく、知識であるということが出来る。

4. t2の活性化と2つの状況を包括する非t領域 知識情報

4.1 t2の活性化

ここでわれわれの問題となっている文(2a)に戻ろう。不自然な(2a)と、問題なく容認される(9)ではどこが違うのか。

2a)? J'ai perdu(t1)la montre que mon père m'AVAIT DONÉE(t2).

9)J'ai perdu(t1)la montre que mon père m'AVAIT DONÉE(t2)il y a deux ans pour mon anniversaire.

まず下線部が付け加わったことで、t2の情報が増えることが挙げられる。だが、時間情報il y a deux ans「二年前」だけでは十分ではない。hier「昨日」またはl'année dernière「去年」を付けただけでは、容認度は依然として低いことからそのことが確認できる。

15a)? J'ai perdu(t1)la montre que mon père m'AVAIT DONNÉE(t2)hier.

15b)? J'ai perdu(t1)la montre que mon père m'VAIT DONNÉE(t2)l'année dernière.

pour mon anniversaireが加えられた(9)では、t2が活性化すると考えることができる。これは、聞き手がt2を、単なる時間軸上の一点ではなく、状況situationとして想起しやすくなるということである。

状況situationが想起されるのだが、状況に限定される知覚を表す分、すなわち出来事文とは異なる。たしかに状況t2のみを考慮に入れて解釈されれば、出来事文となるが、このような場合には複合過去(2b)が用いられる。

2b) J'ai perdu(t1)la montre que mon père m'A DONNÉE(t2).

複合過去に置かれた2bには二つの解釈が可能である。ひとつめはt1の一時空を領域として解釈する「時計を無くした!」という出来事のみを述べるものである。この出来事を、その場にいた人は知覚することができる。もうひとつは過去の時点t1と「今」を両方含む領域で解釈され、「時計を無くした(ので今はない)」ということ述べるものである。ここでは2つの事象(t1

時点での紛失と現時点の不在) が関係づけられており、知的加工を経ていると言える。²

ここで注意したいのは、いずれの場合も、la montreは「父に貰った時計」(montre donnée de mon père) としてのみ認識されているということである。「貰った」donnerの生起する時点(t2)は極限まで背景化されている。t2はt1以前のいつかの時点ではあるだろうが、重要ではない。したがってt2の状況は想起されない。貰った人は重要だが、貰った状況は重要ではないのである。このように重要なのはt1のみである場合、もしくはt1と現時点t0のみである場合、複合過去で十全に表し得る。

16) t1のみ、あるいはt1と今t0が活性化される。t2は背景化されている。



このことが、2aの大過去が奇妙に響く理由だと考える。t1 (と今) だけが重要ならば、複合過去が適切で、わざわざ2aのように大過去を用いる必要はない。このことから下記(17)の仮説が立てられる。

17) 仮説：「t2が活性化されているか否かが、大過去が自然か不自然かを分ける。」

この仮説には次のような反論が予想される。「(18)は問題なく容認される大過去だが、上の(9)のように、情報が付け加えられてはいない。t2の状況をとりにたてて詳しくされているようにも見えないが、t2は活性化されているといえるのか。」

18) Il a tenu(t1) la promesse qu'il m'avait faite(t2).

これに対しては、次の2つの理由から、「t2は活性化されている」と考える。ひとつめの理由は、promesse「約束」は名詞ではあるが、行為を表す。「誰が誰に」など状況を喚起しやすいということである。もうひとつの理由は、文脈によって既に知識が共有されているということである。この発話を実際にする(聞く)当事者は、「約束」の内容、いつ、だれにした約束か…など(「あの時、彼が私にした約束」)を知っている。状況を記憶として持っていて、思い起こしている。そうでないと発話する意味がなく、また理解されない。

4.2 二つの状況の活性化 → 非t領域 → 知識

では、(2a)の大過去の状況t2が活性化されるとどうなるのか。まず(9)の場合の大過去を見る。

9) J'ai perdu(t₁)la montre que mon père m'AVAIT DONÉE(t₂)il y a deux ans pour mon anniversaire.

「貰った」donnerだけでは、t₂をsituationとして聞き手に想起させるのに十分でない。だが下線部の情報が加わると、t₂が活性化する。聞き手が出来事の起こる場、すなわち状況situationとして想起しやすくなる。この結果、t₂が活性化される。t₁はもともと活性化されているため、二つの異なる状況situationが同時に活性化されていることになる。このことにより、t₁の「[je-perdre-la montre]」も、t₂の「[mon père-me donner]」も、t₁、t₂のどちらも含む非t領域で解釈されることになる。

19) 「二年前の誕生日の、あの時(t₂)貰った時計を無くした(t₁)」

J'ai perdu(t₁)la montre que mon père m'AVAIT DONÉE(t₂)il y a deux ans pour mon anniversaire.

————●t₂————●t₁————>今

領域は2つの時点t₁、t₂を同時に包括する非t領域：■

このことを考慮に入れると、仮説(17)は仮説(20)のように改められる。

20) 仮説：「t₂が活性化されて、t₁、t₂両者を含む領域で解釈されるか否かが、大過去が自然であるか不自然であるかを分ける。」

t₂が活性化されても、t₂の時点のみをt領域として大過去が解釈されることはない。大過去で表された事態の生起時点t₂はt₁と相対的にとらえられたもので、t₂が活性化するためにはt₁がある程度活性化してはならないからである。発話当事者解釈者の念頭には常に状況t₁があるということになる。このことから、大過去の意味とは、次のようなものと考えることができる。

21) 仮説「大過去の意味」：

同一領域に、2つの状況 (= 2つの出来事) t1、t2が存在する。その2つの状況をどちらも考慮に入れて解釈せよ。

同一領域内に2つの状況を含む領域とは非t領域である。非t領域で解釈される文は知識を表す。大過去は事態を「知識として表す」ということができる。

「無くした」je-perdre-la montre、「くれた」mon père -me donner la montreはどちらも目撃することが可能な出来事である。しかし、両方を組み合わせた「無くした (t1) のは、あの時 (t2) 貰った時計だ」という命題は、見ること、知覚することはできない。知識として伝達される。大過去は領域に必ず2つの状況を含む。t1を踏まえてt2の事態を述べる、知識情報を述べる形態である。

4.3 現在にかかわる大過去

2章で見た、現在にかかわる大過去も、知識を表すものである。(22) - (24) はそれぞれ「注意をするように言った」、「考えなかった」、「言い当てた」という出来事だけを言うものではなく、既に共有済みのt1で起きた事象も併せて述べている。大過去が「t1の事象も考慮に入れてt2の出来事を解釈せよ」という指令だからである。

22) Je t'avais dit de faire attention !

23) Je n'y avais pas pensé.

24) Je l'avais bien deviné !

(22) は、t1で起きた「皿が割れた」という共有済みの事象を合わせて解釈することで、「注意するように言った《のに》壊した」のように2つの状況を総括するものになり、非難のニュアンスが出てくる。

ex Je t'AVAIS DIT de faire attention !

「注意するように言った(t2) (+ 皿が割れた (t1))」

(←大過去の指令「t1の事象も考慮に入れてt2の出来事を解釈せよ」)

語気緩和の大過去

大過去が出現し、しかも状況が一つしか明示されていないとき、すなわち聞き手がまだt1、t2の2つの状況を理解していないとき、聞き手は解釈時にもう一つの状況を探すことになる。語気緩和の大過去は、t1の状況が明示されていず、(22)の「皿が割れた」のような共有済みの体験もない。だが、大過去に置かれているので、聞き手は、言表されたもの以外にも併せて考えるべき他の事象があるはずだと考える。このことが、一步引いた、遠慮のニュアンスを出すことになる。

25)



26) J'étais venu vous demander...「来ました ● (が、他の事象 ○ がある)

27) J'avais cru comprendre...「分かったと思っていました ● (が、他の事象 ○ がある)」

4.4 「場」に関する知識の共有

大過去の機能として、状況t1に関する知識を述べ、聞き手に背景知識として共有させることができる。

冒頭の大過去 (東郷2011)

例 (28) の大過去は、本稿の対象とするディスクールの大過去ではないが、次に起こる出来事 (=これから物語を実際に進行させる出来事) を期待させる。

28) Monsieur Dupont, exporteur de dentelle, avait établi sa maison de commerce à Bruxelles. Il habitait dans une maison de banlieue près de la ville. Monsieur Dupont menait une vie honorable mais il n'avait jamais de chance. Il est évident que c'était vraiment l'homme le plus malchanceux du monde. (J.K. Philips *Contes sympathiques* in 東郷2011)

「出来事の期待」は、大過去が2つの状況を同時に含む領域で解釈される形で「t1も考慮に入れてt2を解釈せよ」という指令を出すことによる。

物語の本筋となる出来事(t1)が起こる前に、「t1の出来事の領域には、t2の出来事 (『会社を設立』) が存在する」ということを予め述べる。こうすることによって読み手に場の背景知識を共

有させる。領域内に併存しているt1があることを聞き手（読者）は予想し、その状況が現れるのを待つ。このような冒頭の大過去は、「出来事t1は大過去の表す事態t2を踏まえているということを知っておけ」という指令である。例(28)は(21)の仮説を補強するものといえる。

また、1章で見た例(3a)を29のようにすると、「眼鏡をかけるようになった」[devoir porter des lunettes] という状況の背景知識を述べるものになり、大過去は容認される。

久しぶりに会った友達に「眼鏡かけるようになったんだ?」と言われて

3a) - Tiens, tu portes tes lunettes en permanence ?

- ? Je n' avais pas suivi les conseils de mon ophtalmo et ma vue a encore baissé. J' ai été bête.

29a) - Tiens, tu portes tes lunettes en permanence ?

- Je n' avais pas suivi les conseils de mon ophtalmo et ma vue avait encore baissé. J' ai été bête.

29b) - Tiens, tu portes tes lunettes en permanence ?

- Je n' avais pas suivi les conseils de mon ophtalmo et ma vue avait encore baissé. J' ai donc dû porter(t1) des lunettes en permanence. J' ai été bête.

「忠告を聞かない」 ne pas suivre-les conseilsに「いつどんなふうにも」という特定の一時空の状況は想像しにくい。このため、t2としては活性化されにくく、(3a)のままでは不自然な文となる。しかし、「同一領域内にもう一つの状況 (= 出来事) が含まれる」という大過去の性質から、(29a) のように変え、領域内の要素 (= 事態) を増やすと、ひとつひとつでは弱くても、少しずつ「t1の状況」が構築される (= 「t1はx、y、z…のような事態を背景状況として持つ」) ことになる。(29b)のように、複合過去で、期待されるt1の出来事「眼鏡をかけるようになった」を明示すると、その背景情報を述べるものであることが明らかになり、さらに容認度は上がる。

説明の大過去（渡邊2017）

渡邊（2017）で「説明の大過去」と呼ばれているものも、この考え方で説明できるように思われる。大過去は、後の場面t1の背景状況として「出来事t2があった」と示すことができる。

(30) のような「説明の半過去」は「状況に放り込まれて、はっと気づくと…になっていた」という「知覚」を表す文である。

「説明の半過去」：「状況に放り込まれて、はっと気づくと…になっていた（知覚）」

30) Le train siffla longuement. On arrivait à la gare.

(半過去) (t1のその場、その状況に事態がある=知覚できる) (→知覚の共有)

これと異なり、大過去は「背景状況としてこのような出来事があった」ということを伝達する。大過去が「大過去に置かれた事態t2をその状況t1に関連させて解釈せよ」という指令を出す。事態t2はt1のその場ではなく知覚はできないが、二つの事態を知識として関連付けることは可能である。受け手は、大過去の事態t2を踏まえたとてt1の事態を解釈することになる。(31)の例で、「ジェルヴェーズが泣き出すのは「ランティエが帰っていない」ということがあったから」という理由説明になっているのは、大過去の使用によって、「泣き出す」elle-éclater en sanglotsと「ランティエが帰ってこない」Lantier-ne pas rentrerが、お互いを結び付けて解釈されることによる。

31) Quand Gervaise s'éveilla, vers cinq heures, raidie, les reins brisés, elle éclata (t1) en sanglots. Lantier n'était pas rentré (t2). (Zola, *L'Assomoir* in 渡邊2017)

「ジェルヴェーズが5時ごろ起きたとき、体はこわばり、腰が痛んだ。彼女は泣き出した。ランティエは戻って来ていなかったのだ」

大過去は「場」(=状況t1)に関する知識の共有を図ることができる。

5. おわりに

本稿では、領域という概念を用い、ディスクールの大過去が使用される条件について考察した。大過去の表す事態の生起する状況t2が活性化されていて、基準となる過去の時点t1と、t2の両者を含む領域で解釈されるか否かが、ディスクールの大過去が自然か不自然を分ける。

大過去は「同一領域に、2つの状況 (= 2つの出来事) t1, t2が存在する。その2つの状況をどちらも考慮に入れて解釈せよ。」という指令であると考えることができる。2つの状況を含む領域とは、知覚の範囲で限られたt領域ではなく、個々の事態を結び付ける知的加工の可能な非t

領域である。大過去はt2の事態を、それと異なる時空t1と関連付けて表す。大過去は出来事を表すものではなく、知識として事態を示す。

大過去を用いることで、t2の事態を、t1の状況に関連する背景的知識として共有させることができる。

今後の課題

残された課題は多い。まずrécitの文脈の大過去との相違点が挙げられる。本稿では、大過去の中でもt1、t2、発話の時点t0の3時点が関わる用法である、ディスカールの大過去を取り上げた。語りrécitにおいては、発話時点t0が関与しない、あるいは極限まで背景化されている。このような語りrécitの文脈では、ディスカール中では不自然な大過去でも容認される。

32a) -Mais qu'est-ce qu'il y a ?

-J'ai raté mon examen parce que je { ?n'avais pas bien révisé./ n'ai pas bien révisé.}

32b) Cette année-là, j'ai raté mon examen parce que je n'avais pas bien révisé.

また、接続詞との共起も考察すべき点だろう。接続詞なし、あるいは順接の接続詞の後では奇妙に響いた大過去が、pourtantなど逆接の接続詞の後では問題なく容認される場合がある。

33a) ? J'ai raté mon examen parce que je n'avais pas bien révisé.

33b) J'ai réussi mon examen pourtant je n'avais pas bien révisé.

これらの容認度の違いは、何が、どのようなメカニズムで、働くことによって生み出されるのか。

その他、récit中の複合過去が予想されるところに出現する大過去³など、検証すべき問題は多いが、今後の課題としたい。

注

1. 本稿のt1の事態に相当する。
2. «une représentation conceptuelle structurée» (Vogeleer & De Mulder1998)
3. 例えば次の下線部に見られるような大過去の使用である。「La jeune femme regardait toujours Mondo. Elle avait de grands yeux calmes et doux, un peu humides. Elle avait ouvert son sac à main et elle avait donné à Mondo un bonbon enveloppé dans un papier transparent.» (Le Clézio *Mondo*)

参考文献

- 井元秀剛 2017『中級フランス語 時制の謎を解く』白水社
- 岸彩子 2014「情報の全体性と部分性」『フランス語学の最前線2』 ひつじ書房 pp.215-248
- 岸彩子 2015「実体験知覚と共有知識－未来の事態を表すフランス語直接法現在形－」和田尚明・渡邊淳也編『時制ならびにその関連領域と認知のメカニズム』TAME研究会 pp.47-73
- 岸彩子 2018「フランス語の大過去I」山村ひろみ編『現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究』九州大学
- 西村牧夫 1985, 2001「現在にかかわる大過去」『フランス語学の諸問題I』三修社 pp.50-62
- 春木仁孝 2000「現代フランス語の大過去とテンス・アスペクト」『言語文化研究』26 pp.179-197
- 春木仁孝 2014「フランス語の時制と認知モード：時間的先行性を表さない大過去を中心に」『フランス語学の最前線』ひつじ書房 pp.1-44
- 東郷雄二 2011『中級フランス語 あらわす文法』白水社
- 東郷雄二 2014「半過去を支える解釈領域－視野狭窄の半過去を中心に」『フランス語学研究』48 pp.37-56
- 渡邊淳也 2018「フランス語の大過去II」山村ひろみ編『現代ロマンス諸語におけるテンス・アスペクト体系の対照研究』九州大学
- Grevisse M. et A. Goosse 2011 *Le Bon Usage*, 15^{ème} édition, Duculot.
- Recanati F. 1996 “Domain of Discourse”, *Linguistics and Philosophy*, 19, pp. 445-475.
- Recanati F. 2004 *Literal Meaning*, Cambridge University Press
- Vogeleer S. 1994 «Le point de vue et les valeurs des temps verbaux», *Travaux de Linguistique* 29, pp. 39-58

Vogeleer S. et W. De Mulder 1998, «*Quand* spécifique et point de vue». *Cahier Chronos 3*, pp. 213-233